



johnny got his gun



ジョニーは 戦場へ行った

ヒビヤ

みゆき座

591
5357

3月下旬より
ロードショー

■72年度芸術祭大賞受賞作品
かつてないみずみずしさと美しさで
執念の鬼オドルトン・トランボが描く
青春の輝き、生きることの強さ、尊さ、素晴らしさ…
■文部省特選／優秀映画鑑賞会特薦
*カンヌ映画祭審査員特別賞を得て本年度ベスト・ワンを狙う感動の秀作



自由業 中島泉子

ティモシー・ボトムズ／キャシー・フィールズ／ジェイソン・ロバース
ドナルド・サザーランド／原作・脚本・監督ドナルド・トランボ
アメリカ映画／日本ヘラルド映画

《カラー作品》

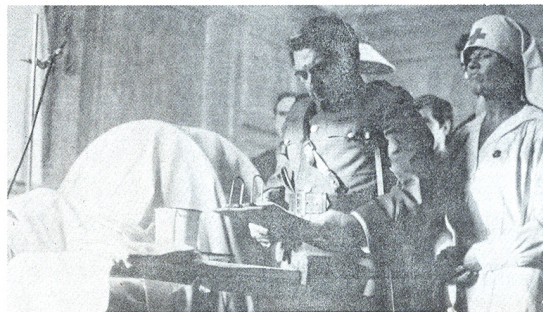
Herald

ジョニーは戦場へ行った

製作……ブルース・キャンベル
監督……ドルトン・トランボ
原作・脚本……
……ドルトン・トランボ
撮影……ジュールス・ブレンナー
編集……ミリー・ムーア

ジョー……ティモシー・ボトムズ
カリー……キャシー・フィールズ
父……ジェイソン・ロバーズ
キリストと呼ばれる男……
……ドナルド・サザーランド
母……マルシャ・ハント
看護婦……ダイアン・パーシー

■カンヌ映画祭審査員特別賞受賞/カラー作品 Johnny Got His Gun



■カンヌ映画祭審査員特別賞に輝く秀作！

一九七一年カンヌ映画祭で異常な感動とセンセーションを呼び起し、審査員特別賞を得た秀作、待望の登場である。

もしも、人間が一举に五つの感覚を失ったのちに、生きつづけていくとしたら、その世界はどうなのだろう。

第一次世界大戦がおわってから、十五年近くそうした状況のもとに生きつづけたイギリス将校が実在したという事実をヒントにドルトン・トランボは、一九三九年に小説「ジョニーは銃をとった」をかいた。これは、レマルクの「西部戦線異常なし」、ヘミングウェイの「武器よさらば」などの第一次世界大戦を描いた反戦小説とならぶ傑作として大きな反響をよんだ。それから三十数年後、トランボ自身が監督して完成したのがこの作品である。

■美しく、みずみずしい人間の素晴らしさ！

あんなにまで、青春の輝やきに満ちあふれ、恋人との愛情もたしかめることのできた肉体が、戦場でひき裂かれた。両手、両足、耳も眼も失なった。名前も失なった。だとしても、その残された神経は生きつづけ、その意識は、たしかなものによみがえる。

陽のぬくもり。文字のなつかしさ。意志を伝える動作の何気ないしぐさ。しかもそれが重要な意味をもつことの発見。

これは、まるっきり「物体化」した人間が、人間そのものに復活していくさまを見つめた驚異的な感動編である。

人間が人間に復活していくことを、これほど美しく、みずみずしくとらえた作品は少ない。人間の素晴らしさ。人間の強さと尊さとをあますことなく描く。現実と過去の思い出と

幻想とを交錯させ、人間の意識の底にまでくこんでいくこの映像美。

しかも、こうした人間がつくられたのは、ほかでもない。この青年には、まったく関係のなかった戦争であるというところに、この作品のテーマが明確に浮びあがっている、それが反戦の訴えとなつて、しみじみとよびかけてくる。

■ドルトン・トランボ監督と新鮮な出演者

人間の意志の強さとその感動が、テーマによりそつて、より強烈な印象を与えていくこの作品は、ドルトン・トランボ、六十五歳の処女作である。そこに、こめられた主張は、いまも、そして、これからも、永くつづいていく。

アカデミー賞を受賞した「黒い牡牛」、「カウボーイ」など、変名によるシナリオから、「栄光への脱出」、「スパルタカス」、「フイクサー」にいたるまで、「赤狩り」に耐えぬきながら、多くの傑作シナリオをかきつづけたこのシナリオ・ライターは、自作小説の映画化で、監督になった。

主人公ジョニーには、「ラスト・ショー」でナイフな演技をみせた新人ティモシー・ボトムズが好演しており、その恋人カリー役のキャシー・フィールズも新鮮だ。とくに、二人のラブ・シーンはみずみずしい。この二人を助けて、ジョニーの父親には、「裸足のイサドラ」の「砂漠の流れ者」の「ジュリアス・シーザ」のジェイスン・ロバーズ。ジェーン・フォンダらとともに、反戦ショーをおこなつて昨年来日した「マッシュ」のドナルド・サザーランド、「青春物語」のダイアン・パーシラが共演している。

(上映時間 一時間五十二分)

■絶賛！感動！涙！

テーマの強烈さ。着想の秀抜き。表現の斬新さ。どの点から見ても、ドルトン・トランボ監督の「ジョニーは戦場へ行った」は第一級の作品である。

映画評論家 佐藤忠男氏

ペテランのシナリオ作家が、30年以上あたためてきたオリジナルを自分で監督しただけに、単なる反戦映画だけでない芸術的結晶となっている。

映画監督 新藤兼人氏

生きることの悲哀を、これほど衝撃的に、しかも美しく描き切った作品に、私は初めて出逢つた。

映画監督 熊井啓氏

なんと恐ろしい、こわい映画でしよう。なんと胸を打つ、感動させる映画でしよう。人間である以上必ず見るべきです。

自由業 中島泉子さん

これまでに観た数多くの映画にない深い感動に胸をうたれました。余りにも痛ましく泣けてしまいました。

主婦 大野俊子さん

最近、これほどいい映画を見た事はない。主人公の悲痛な叫びに、涙がとまらなかつた。死さえ許されないなんて……。

学生 伊津野久子さん